

オンライン日本語講座「NIHONGO Starter」

—電子書籍型教材の開発と運用—

篠原亜紀・築島史恵

〔キーワード〕 JMOOC、eラーニング教材、入門レベル、JF 日本語教育スタンダード、Can-do

〔要 旨〕

国際交流基金が放送大学と共同開発した電子書籍型の教材が、JMOOC のオンライン講座として公開されている。本報告では、この教材の概要とその運用の状況について紹介する。教材のレベルは入門(JF 日本語教育スタンダードの A1 レベル) で、使用言語は英語である。Lesson 1～10まで全10冊あり、1冊45分ぐらいで学習できる。各 Lesson の目標は「Can-do」で提示され、スキットの動画を中心に、解説、練習問題、Can-do の練習などから構成されている。公開後、日本語や日本文化に関心を持つ様々な国の多様な受講者が登録しており、修了者の事後評価も高い。ただ、MOOC 一般に共通する継続性の課題については、本講座にも当てはまる。現在は Facebook を用いた学習コミュニティの活性化などに取り組んでいるが、今後も本講座の受講者の増加と継続率の高い安定に向けて様々な方策を検討していきたい。

1. はじめに

2014年4月、「NIHONGO Starter (にほんごにゅうもん)」が JMOOC (Japan Massive Open Online Courses、次章で詳述) の一講座としてスタートした⁽¹⁾。これは、国際交流基金日本語国際センターが放送大学と共同開発した電子書籍型の eラーニング教材を用いたオンライン講座である。

この講座の開発は、当初、積極的に留学生の受け入れを行っている日本国内の大学への貢献を目的として、来日前に日本語を学習する機会のない留学予定者のための独学用日本語学習教材を制作するという放送大学の企画から始まった。近年、文部科学省による「留学生30万人計画」、「グローバル人材育成推進事業」、「世界展開力強化事業」等の大学国際化政策が推進されている。その中で、日本国内の大学院、特に理工系大学院では、英語のみで学位を取得できるコースが多く設置され、来日するまで日本語学習経験がない留学生や、日本語を使用せずに研究活動を行う留学生も増えてきたためである。

一方、この企画立案と前後して、放送大学が JMOOC 公認のプラットフォームとして2014年4月より OUI MOOC を提供することが決まり、本講座はその最初の講座の一つとして配信さ

れることとなった。本報告では、この「NIHONGO Starter」の講座および教材の開発と講座公開後の反響、そして、そこから見えてきた課題について報告する。

2. 大規模公開オンライン講座の現状

2008年ごろカナダ・米国で始まった MOOC は、2012年にエリート大学が参加したことで一大ブームとなった。MOOC とは、Massive Open Online Courses (大規模公開オンライン講座) の略で、オンラインで公開された講座を誰でも無料で受講でき、修了条件を満たすと修了証が取得できるサービスである。講座を配信するプラットフォームには、その代表的なものに米国のコーセラ社 (Coursera)、エデックス社 (edX) 等があるが、現在では、様々な文化圏・言語圏に独自のものが構築されている。

2013年、日本でも、日本版 MOOC の普及を目指し、日本の大学・企業の連合組織として、「一般社団法人日本オープンオンライン教育推進協議会 (略称 JMOOC)」が設立された⁽²⁾。2014年4月以来、様々な講座が開講されている。JMOOC 公認のプラットフォームには、現在、NTTドコモ社と NTT ナレッジ・スクウェア社による「gacco」、ネットラーニング社による「Open Learning, Japan」、そして本講座が開講している放送大学による「OUJ MOOC」がある。

3. 講座および教材の方針

本講座を開発するにあたり、以下の3つの方針を立てた。

- 1) 受講する時間や場所を問わないこと
- 2) 独学が可能なこと
- 3) 最後まで楽しく継続できること

講座の仕組みについては後述するが、この方針に従い、講座で使用する教材の形式には、外出先や移動中など、いつでもどこでも学習できるよう、パソコンだけでなく、携帯電話やタブレット端末にダウンロードして使用できる電子書籍型のものを試みることにした。そして、独学用として、教師や補助教材の助けを借りずに学習できる枠組みを策定した。まず、指示や解説は英語で行い、ナビゲーター役のキャラクターを設置した。また、画面上に黒板の役割を果たす動画を配し、解説と併用して確認できるようにすることを工夫した。さらに、各課のはじめに目標を明確に提示し、最後には自己評価で自身の達成度がわかるようにした。一方、独学の場合、最後まで続けることが難しく、途中でやめてしまう学習者が少なくないことを考慮し、楽しみながら最後まで続けられる教材を目指した。具体的には、教材の中心となるスキットには、ストーリーにゆるやかな連続性を持たせることで、次の回を続けて見たくなるようなものにし、各課のコーナーにはバラエティのあるコンテンツを配した。そして、学習修了時に修了証が授与される MOOC の仕組みを適用することを決定した。

教材作成にあたっては、上述のように、講座の企画当初、その主たる対象者を日本の大学に留学予定の理工系の学生と想定していたため、理工系大学院の留学生と日本人学生にアンケートを行ってグループプロフィールを作成し、彼らの言語使用場面を特定した。その結果、専門の勉強や研究については英語等を用いている学生にも、キャンパス内外の日常的な大学生活では基本的な日本語が必要になることがわかり（羽吹・篠原2014）、教材の中心となるスキットにはそのような場面を取り入れた。一方、海外でも無償で受講できる JMOOC の講座としての配信が決まったことで、必ずしも大学への留学が目前に決まっている学生だけでなく、なかなか日本語学習の機会や時間が持てない幅広い受講者の登録も予想されることとなった。そのため、後述するように、各課で受講者が挑戦する言語活動（Can-do）や練習問題では、必ずしも大学に限らず、日本の一般的な日常生活でも使用する機会が多いと思われるものにも配慮し、全体的にはできるだけ汎用性もある教材作成を心掛けることとした。

4. 講座および教材の概要

4.1 講座のしくみ

講座に用いている教材は、NPO 法人 CCC-TIES⁽³⁾が開発した「CHiLO Book」⁽⁴⁾と呼ばれる電子書籍である。スマートフォン、タブレット、パソコン等にダウンロードして学習することができる。CHiLO Book を読むには、予め端末に電子書籍リーダーをインストールしておく必要がある（ダウンロードせずにブラウザで閲覧することができる Web 版もある）。

受講は、まず、「NIHONGO Starter」の Facebook グループに参加登録し⁽⁵⁾、参加が許可されたらグループページで CHiLO Book 情報を参照して電子書籍をダウンロードする（または、Web 版を使用する）。電子書籍は、一度ダウンロードすればどこでも読むことができるが、後述する練習問題や Can-do チェック（Can-do の自己評価）を行うにはインターネットへの接続が必要である。学習履歴や成績などは外部の専用サーバーに蓄積され、修了者には修了バッジや修了証が授与される。

また、本講座では、Facebook 上に学習コミュニティが作られ、さらに英語およびスペイン語による言語別フォーラム（掲示板）にもリンク



図1 教材のしくみ

している。受講者は、ここを使って、自由に質問や意見交換等ができるようになっている。

4.2 教材のレベルとシラバス

本講座の教材は入門レベルであり、「JF日本語教育スタンダード」⁽⁶⁾のA1にあたる。教材のシラバスは、このレベルのCan-doに基づいて作成した。各課の目標とするCan-doは、国際交流基金が「みんなの「Can-do」サイト」⁽⁷⁾で公開しているJF Can-doを基にしており、このスタンダードに準拠した教材『まるごと 日本のことばと文化』（入門 A1 かつどう）の第1課から第10課までを参考に作成した。

表1 『NIHONGO Starter』 各課のタイトルと Can-do

課	タイトル	目標 Can-do	
1	こんにちは	1	あいさつをします Exchange greetings
		2	日本語を読みます Recognise Japanese characters
2	もういちど おねがいします	1	研究室で話します Use basic expressions in the laboratory
		2	名前と国を書きます Write your name and country in Japanese
3	どうぞ よろしく	1	自分のことを簡単に話します Give a simple self introduction
		2	名刺を読みます Recognise the parts of a business card
4	かぞくは 3にんです	1	家族のことを簡単に話します Talk briefly about your family
		2	家族の写真を見て話します Tell someone about your family,using a family photo
5	なにが すきですか	1	好きな食べ物何か話します Talk about your favorite foods
		2	朝ごはんの習慣について話します Talk about your breakfast
6	どこで たべますか	1	昼ごはんをどこでいっしょに 食べるか友だちと話します Talk with a friend about where to go for lunch
		2	メニューを読みます Read a menu
		3	食堂で簡単な注文をします Order food at cafeteria
7	へやが 4つあります	1	どんな家に住んでいるか言います Say what kind of home you live in
		2	家に何があるか言います Say what you have in your home
		3	友だちを家に招待するEメール を書きます Write an E-mail inviting someone to your home
8	いいへやですね	1	物を部屋のどこに置くか聞きます ／言います Ask / Say where to put things in the room
		2	家を訪問します／家に友だちを むかえます Visit / Welcome a friend
9	なんじに おきますか	1	何かをする時間を言います Say the time you do something
		2	一日の生活を話します Talk about your daily routine
10	いつが いいですか	1	パーティーをいつにするか 話します Talk about when to have a party
		2	バースデーカードを書きます Write a birthday card

4.3 各課の構成

教材は、全10課（1課につき1冊、全10冊）からなり、各課は45分ほどで学習できるようになっている。

各課の構成は以下のとおりである。学習者は電子書籍のページをめくり、教材の流れにそって学習する。

- (1) Skit
 - ①各課の Can-do の提示と動機づけ
 - ②スキット
 - ③ Can-do に関わるシーンを再生（気づき）
- (2) Explanation（表現や文法の解説）
- (3) Exercise（表現や文法の練習問題）
- (4) Can-do Practice（(1) ③を登場人物と一緒に練習）
- (5) Can-do Challenge（(1) ③の活動に一人で挑戦）
- (6) Can-do Check（自己評価）
- (7) Learn More（文化等についてのコラム、参考資料）

5. 教材の詳細

5.1 <Skit>

スキットの主人公は、ロボットを開発するために日本の大学院に留学している「ジョゼ」である。日本政府がブラジルの理工系留学生大規模派遣事業[®]に応じて受け入れの協力を進めていることから、主人公をブラジル人留学生と設定した。また、理工系留学生受け入れ実績数の多い台湾およびタイからの留学生も登場人物とした。舞台は「ロボット大学」の研究室とジョゼのアパートである。

スキットは、受講者の集中力が続く3分を目安に作成した。場面は、3. に述べたように、羽吹・篠原（2014）の調査結果に基づき、英語で研究活動を行っている理工系の大学院生や研究生にとっても日本語が必要となる大学生活（キャンパス内外）に焦点を当てた。

このスキットに先立ち、まず、ナビゲーター役のロボット「ロボじい」が Can-do を提示し、動機づけのための質問をする。その後、約3分間の動画（スキット）を見せる。字幕は、学習者が必要に応じて、英語、ローマ字、かな、字幕なしの中から選択することができる。スキットに続いて、スキットの中から、課の目標 Can-do に関わる部分（シーン）を数か所再生する。ここでは、Can-do を達成するためにどのような表現が使われていたかを学習者自身に気づかせることを目的としている。



図2 <Skit>の例

5.2 <Explanation>

ここでは、<Skit>の中の Can-do に関わる部分の主な文法や語彙、表現をロボじいが解説⁽⁹⁾する。独学でも学習しやすいように、左側に教室の黒板やスライドのような役割を果たすイラスト動画を配し、右側に英語による解説文を記した。動画を再生すれば、解説文の音声と同時に文字や絵が動き、理解を助けるようになっている。解説文は、受講者の心理的な負担を増やさないよう、Can-do の達成に重要な項目に絞り、1 ページ前後 (10~40行程度) に留めることとした。

表2 <Explanation>の例

課	Can-do	Explanation のタイトル	取り上げている内容
2	研究室で話す	書いてください もう一度お願いします 仲間ってどういう意味ですか	・て形 ・繰り返し等を依頼する表現 ・意味を問う表現
	名前と国を書く	カタカナの名前	・カタカナ
6	昼ごはんをどこで いっしょに食べるか 友だちと話す	今日はどこで食べますか	・(場所) +で ・今日、どこで昼ごはんを食べますか 学食で食べましょう
		好きな料理は何ですか	・好きな (な形容詞の説明) ・好きな料理はなんですか。 ・～が好きです。
		学食のラーメンは おいしいですよ	・おいしい (い形容詞の説明) ・終助詞「よ」 ・食事に関する形容詞
	メニューを読む	メニューを読みます	・学食のメニュー
	食堂で簡単な注文 をする	ラーメン1つください	・ひとつ~いつつ ・注文の表現

5.3 <Exercise>

ここでは、<Explanation>で学習した表現や文法が理解できているかどうかを練習問題で確認する。問題は、『まるごと 日本のことばと文化』(入門 A 1 りかい) および『まるごと

日本のことばと文化』(入門 A 1 かつどう)を参考に作成した選択式の問題である。文字を習得していなくても取り組めるよう、かなとローマ字を併記し、イラストも多用した。また、聴き取りの練習はもちろん、それ以外の部分にも音声を多く取り入れ、音を聞く機会を増やすようにした。

<Exercise>は電子書籍の一部ではあるが、インターネットに接続して行う。そうすることで、自分のアカウントに学習履歴が残り、練習問題に取り組んだ日時、所要時間、成績、正解した問題やできなかった問題などがいつでも確認できる。練習問題は、何度でもやり直せるが、この<Exercise>に75%以上正解することが、各課の修了認定の条件の一つとなっている。

5.4 <Can-do Practice>

ここでは、Can-doを達成するための練習をする。主に語彙や文法などの言語能力を問う<Exercise>に対し、<Can-do Practice>では、実際に言語活動(パフォーマンス)を行う練習に取り組むこととなる。練習には、スキットの中で、登場人物がCan-doを遂行している部分を切り出した動画を使用している。活動の主なものはやりとりの発話で、学習者は動画を再生し、「Speak!」の文字が出たら、登場人物と一緒に発話し、会話の練習をする。ここでは、登場人物と同じセリフを言えればよい。ローマ字の字幕も出るため、字幕を見ながら発話することも可能である。

5.5 <Can-do Challenge>

<Can-do Challenge>では、自分の力でCan-doが達成できるかどうかを試す。1つ前のステップ<Can-do Practice>では、登場人物と同じ発話で練習を行ったが、<Can-do Challenge>では、学習者が自分自身で何を言ったらよいか考えて話すことが期待されている。たとえば、登場人物から何かを質問されたらと仮定して、自分についての答えを言う。

ここでは、スキットから切り出した画像(静止画)と音声を組み合わせて使用している。学習者は画像を見て、状況や場面をイメージしながら音声を聞き、「Your turn!」の文字が出たら、画面に向かって話してみる。自分一人で答えられたら、Can-doが達成できたことになる。



図3 <Can-do Practice>の例



図4 <Can-do Challenge>の例

5.6 <Can-do Check>

最後に Can-do チェックを行う。<Can-do Challenge>で行った自分の活動を振り返り、最初に課の目標として提示された Can-do が「できた」かどうかを自己評価する。評価は3段階で、「★：しました」「★★：できました」「★★★：よくできました」となっている。教材で学習者に提示している評価の指針は、表3のとおりである。各課の修了認定の条件は、★2つ以上にチェックがつくことである。

表3 自己評価の指針

★I did it, but could do it better.	Could not answer correctly without referring to other pages
★★I did it.	Answered correctly but took time
★★★I did it well.	Knew what to answer and responded quickly

5.7 <Learn More>

その課で学んだことに関連した情報をさらに詳しく紹介するコーナーである。言語や文化についてより深く知るためのコラム「Language and Culture」や、スキットのスクリプト（英語・ローマ字・かな・漢字かな交じり）が掲載されている。ひらがな表などの参考資料もここに置かれている。

5.8 修了認定

各課の修了認定を受けるには、上述のように、その課の<Exercise>で75%正解することと、<Can-do Check>ですべての Can-do に★2つ以上をつけることが必要である。この条件がクリアされると、Web上の学習履歴の中の「My Badges」コーナーに自動的にその課の修了バッジが授与される。すべての課を修了し、10個のバッジが集まるとコース修了バッジが授与される。また、設定されたコース期間内に修了した希望者には、メール申請により、JMOOCの一講座を修了したという修了証（署名は放送大学の担当教授）が本人の名前入りで作成され、送付される。

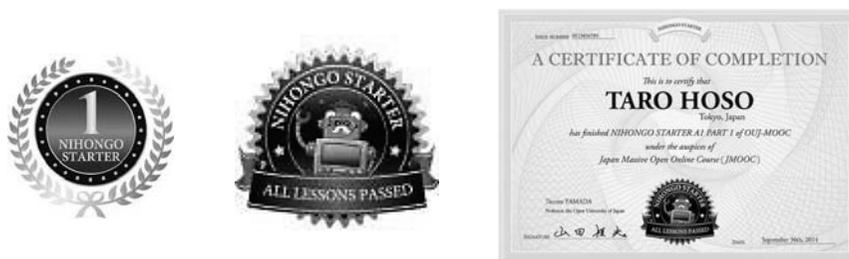


図5 第1課の修了バッジ・コース修了バッジ・修了証

6. 公開後の反応

公開は、上述のように2014年4月から始まり、10月末までに3回のコースが行われた。1回目は4月14日開講、2回目は6月2日開講で、いずれも1週間に2課ずつダウンロードできるように設定され、5週間で配信を終えた⁽⁴⁰⁾。3回目は8月4日に開講し、2回目までと異なり、開講と同時に全課のダウンロードができるような方策をとった。ただし、毎週、定期的に、修了を目指してほしい2課分についての案内を行った。受講者は、開講回数を重ねるにしたがって人数だけでなく出身国数も広がってきている。ただ、受講登録がFacebookを通じて行われるためもあってか、受講者には地域的な偏りが見られ、登録も、週によって、一定の国や地域からまとまって増えるケースが多い。

表4は、Class 3（3回目のコース）に登録をし、スタッフの呼びかけに応じて、Facebook上で自己紹介や受講動機を書き込んだ受講者145名の在住国の内訳である。

表4 Class 3の受講者自己紹介文に見る国・地域別内訳

国・地域		人数	国・地域		人数	国・地域		人数
東 アジア	日本	1	中米	パナマ	2	東欧	スロバキア	8
	中国	1		メキシコ	6		セルビア	5
	<台湾>	1	アルゼンチン	6	ブルガリア		10	
東南 アジア	インドネシア	8	南米	エクアドル	1		ベラルーシ	1
	カンボジア	7		コロンビア	10		ポーランド	1
	シンガポール	1		チリ	3		ボスニア・ヘルツェゴビナ	3
	フィリピン	2		ブラジル	5		マケドニア	3
	マレーシア	3		ベネズエラ	17		ルーマニア	1
南 アジア	インド	2	西欧	アイルランド	1		ロシア	2
	ネパール	2		イタリア	1		カタール	2
北米	カナダ	2		英国	2	中東	レバノン	1
	米国	7		オランダ	1	アフリカ	ケニア	7
				スペイン	7		リベリア	1
			ドイツ	1				

3. にも述べたように、この教材は、スキットの場面は大学の学生生活ではあるが、MOOCでの配信が急遽決まり、自国ではなかなか日本語学習の機会に恵まれない一般受講者の登録も見込み、汎用性のある内容を工夫した。実際、受講者には、10代後半から30代前半が多かったものの、留学が決定している受講者だけでなく、アニメ、漫画、または伝統的な文化などを通して、日本や日本語に興味を持つようになったという受講者や、テレビや書籍等を通して日本人の考え方やしつけ、信念などに魅かれたりしたことで、いつか日本語を勉強したいと思っていたものの、なかなか時間的、または場所的にその機会に恵まれなかったという受講者も多い。また、入門レベルの日本語は自国で習ったことがあるが、日本語の動画教材にはなかなか触れられなかった、日本語を話す人たちを自分の目で見る必要を感じた、という動機や、言語その

もの、異文化そのものに興味があり、日本語をその一つとして学ぶと共に、この講座でいろいろな人と友だちになりたい、などの希望も書き込まれている。

そして、この Class 3 を現時点で修了している86名からのアンケートによれば、このコースについての評価は、「Very satisfied」が58名、「Somewhat satisfied」が25名、「Neither satisfied nor dissatisfied」が3名となっている。具体的には、直近の留学予定者から「日本に行く（留学する）自信がついた」というコメントがあったほか、「とても楽しい journey だった」「ほかのネット上のどの講座に比べても、ユニークで楽しくすごくよかった」「日本についてたくさんのことを学んだ。たぶん、先生（staff）が予測していたより、私達はたくさんのことを学んだと思う」「ずっと前に少しだけ習った日本語を思い出すことができた」「今度の旅行で使ってみてみたい」「いつか必ず日本に行きたい！と思った」「3年以内に日本に行く計画を立て始めた」などという声が、アンケートにも Facebook 上にも書き込まれた。

こうしてみると、やはり、本講座は、日本や日本語に関心を持っている、言わば潜在的な「現在の日本に関心を持つ」層の人たちにも働きかけることになったことがわかる。本来、MOOC に期待されたのは高等教育のイノベーションであったかもしれないが、オンラインでこのような不特定多数の人たちへの働きかけを行う講座には、より広範な、生涯学習的な意義を認めることがあってもいいのではないかと思う。特に、今回のようなごく入門レベルの外国語の講座は、そういった需要にも応えるものとして、海外でのその言語の位置づけを高め、その国を好意的に受け入れる人たちを増やすことに繋げることができないのではないだろうか。そうであれば、たとえ外国語教育の講座であったとしても、その第一義的な目的が、受講者の確実な飛躍的な能力の向上ではなく、それがきっかけとなって、「おもしろそう」だと思わせること、さらに、「どこか自分の周りに他のチャンスがないだろうか」「もっと勉強するためにはどうしたらよいだろうか」と考えさせること、また、「実際に日本に行って、この言語を使ってみたい」「その言語の母語話者とでなくても、どこかで、この言語を話してみたい」という夢を抱かせることであってもよいのではないかと考える。次章では、そのような新たな発想で、MOOC の講座の一つとして、現在取り組んでいる運用上の試みと課題について述べ、まとめたい。

7. 現在の取り組みと今後の課題

7.1 現在の取り組み

本講座に限らず、MOOC 共通の課題として、継続性の問題がある。MOOC 全体では、その継続率が10%にも満たないという報告もある。本講座についても、やはり、図6が表すように、この継続性が一番の課題である。図6は、各課の<Exercise>と<Can-do Check>を受けた受講者数の推移を、第1課の最初の<Exercise>を受けた受講者を「1.0」として表したグラフである。特に、今回の講座では常時インターネットに接続できる環境がない受講者にも便宜を図

るために、電子書籍型というスタイルを取っており、最新のインタラク션을組み込む仕組みはあえて行わず、修了認定に直接結びつく Can-do 評価も、自己評価のみに任せることとした。その結果、意識の高い受講者でないと、自分の力の伸びを把握し、その達成感を次の学習意欲に結びつけることはなかなか難しいと思われる。

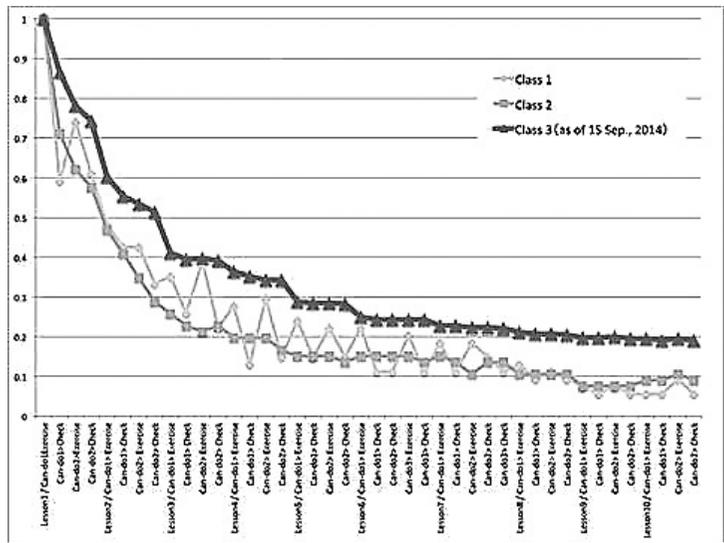


図6 Class 1, 2, 3の<Exercise>と<Can-do Check>受験率

大学等での MOOC の利用については、このような欠点を補完するために、反転授業の提案等が多く行われているが、今回の講座では、そもそも、学習機会に恵まれない受講者を対象にしており、受講者の居住地も全世界に及ぶため、反転授業や、受講後に受講者たちが実際に集い話し合う「Meet-up」を行うことは難しい。このような状況の中で、この継続性の課題に取り組むため、本講座では、現在、受講者の学習意欲を持続させる方策の一つとして、4.1で述べた学習コミュニティ（Facebook や言語別フォーラム）の活性化に力を注ぎ、できるだけバーチャルな Meet-up の場を提供するための工夫を重ねている。

そのために、まず、英語、スペイン語、アラビア語を駆使できるファシリテーターとして、あまり「日本語教師が教える」という目線ではなく、このコミュニティのサポーター的役割を果たしてくれる協力者を募った。そして、制作スタッフとこのファシリテーター、および、講座に関心を持った日本語教師とで「Connoisseur」という非公開の Facebook グループを作り、学習コミュニティにおける受講者へのサポートの仕方や受講者の「やる気」への働きかけなどについて、常にディスカッションを行っている。

学習コミュニティでのサポートの一つは、このページに書き込まれる質問に対し、適宜、回答を書き込むことである。たとえば、教材の内容や進め方についての質問には、できるだけすばやく対応する一方、勉強方法や学習の困難さなどについての相談には、しばらく他の受講者からの投稿を待つ。彼らの中で、活発なやりとりが生まれるようであれば、あえて見守ることで、学習コミュニティが自主的に運営されていくことを促している。もう一つのサポートは、受講者がまだ取り組んでいない教材の内容に興味を持たせたり、自己評価で終わっている学習

成果を互いに披露し合うような場を作ったりすることである。たとえば、文字の学習についてのやりとりが続くようであれば、いくつかの参考サイトを紹介する。また、自己紹介や家族紹介、好きな食べ物、一日の生活などについて話すという目標 Can-do の課の進度に合わせて、Facebook 上に、自分のことについて日本語で書き込めるようなテーマを投げかけたり、スタッフの生活を撮った写真をアップしたりして、互いに共有しようという仕掛けを試みている。

言語別フォーラム（掲示板）では、自分の母語や使用可能な言語でやりとりができるため、細かいやりとりが活発に行われており、その中から、互いの質問に自分なりの答えやアイデアを書き込んで学習者同士のやりとりを始めるケースや、毎週、同じ曜日の同じ時間に Skype を使って日本語の会話をしてみよう、という自主グループもできた。

この2つの学習コミュニティは、受講者からも高い評価を得ている。上述の86名のアンケートでは、85%以上の受講者が Facebook のやりとりに満足しており、フォーラムには実際に参加した受講者自体は60%程度であったが、ほぼ全員がその活動に満足している。具体的には、「先生の姿はあまり見えなかったが、このコミュニティは本当に楽しくて大好きだった」「みんなが助けてくれて、何も文句がないくらいだ」「同じ関心を持つ人たちがいることがうれしかった」「世界中の友達と一緒に勉強できた気がした。日本だけでなく、多くの文化を知ることができた」などと記述され、学習者同士が助け合って学ぶ場を作ろうとした意図は、受講者にも認められたとすることができよう。中には、ファシリテーター並みの書き込みを入れてサポートしてくれる「先輩」学習者も現れ、自分の受講が終わっても、次に開講された Class にも関わってくれた上に、他の学習者の質問に対して「このサイトを見ると自分でも調べられるよ」という助言や「(先生だけに頼らず) みんなでも助け合っていこうよ」といった励ましを入れてくれている。

7.2 今後の課題

修了者のアンケートに見られた「要望や提案」は、世界中の受講者の様々な事情ゆえにシステムや機能に関するものが多く、内容に関しては、「実際にやりとりできる方法があったらいい」「もっとたくさん練習問題をやりたかった」「発音の練習を入れてほしい」という意見が複数あったほかは、「もっと上のレベルのものを用意してほしい」「この講座の趣旨がそうではないことはよくわかっているが、もっと深く勉強したい人の講座も作ってほしい」というコメントが大勢を占めた。

ただ、上にも述べたように、この講座の一番の課題は、修了者自体の比率をもっと上げることである。Class 1 や Class 2 の完遂率が、MOOC の平均どおり10%だったのに対し、Class 3 の完遂率が20%まで上がったのは、7.1に書いたようなスタッフの取り組みが功を奏したところも大きいと考えている。現在までのところ、このような取り組みは、講座の進度に遅れないよ

う、日々考え続けている状態であるが、次回のコースからは、学習意欲を導き出す方策をより積極的に導入していきたい。

また、講座の受講者の母集団を増やすためには、学習開始前から、本講座を受講することでどのような道が開かれるのか、どのようなよいことが自分を待っているのか、という夢を抱かせることが必要であろう。入門レベルである本講座の場合、具体的な職業に結びつく将来性は語れないにしても、受講者の多くが自己紹介に書き込んだように、いつか来日して日本で学んだり働いたりする日のことや、日本に旅行に来て日本語を使う時のことをイメージできるような積極的な励ましが必要であると考え。そのためには、学習動機や、学習によって何をしたいと思っているのかといった受講生のニーズを見ながら、どのようなサポートやフォローを望んでいるのかを考慮した上で、学習を始めようとしている受講者に「この勉強をしていれば、このようなことができるようになる」というやりがいを感じさせるような仕掛けを検討しなければならない。

一方、受講者に意欲を持ち続けさせるためには、各課や全講座の修了者に、何を以て喜びを感じさせることができるか、または、どんなチャンスを提供することができるか、ということ再考することが重要であろう。Class 3では、講座終了時に、全10課で学んだことをまとめて短い文章を書き込んでみるタスクを投げかけたが、このような達成感を実感できる機会や次のステップの学習方法についての紹介などをより積極的に行っていきたい。また、今回も多少は自主的に行われていたが、講座スタッフや教師からのバッジや修了証だけでなく、受講者同士が讃えあったり、ほめあったりすることのできる相互評価を、もう一つの外発的な報酬として、促していきたい。さらに、将来的には、評価システム自体を多様にして、学習開始時に、受講者個人が、自分の学習目的にしたがって、自分はどの方法でどの力を評価してもらいたいか、または自分で評価したいかを選ばせるような方法も考えられよう。

8. おわりに

本教材の開発には、放送大学、国際交流基金、映像製作会社、教材制作と運用を実質的に行っている CCC-TIES、という様々な業種の専門家が関わってきた。この協働作業には、当然、それぞれの立場から譲れないところもあり、制作も講座の運営も、決して楽なものではなかった。しかし、このような専門性がぶつかり合う中での作業だからこそ、その議論の中で、受講者の背景やニーズ、そして彼らのスキーマなどについて徹底的に考えることができ、受講者側の立場から見た講座や教材の課題、そして、これからのオンライン教材が留意すべき点など、改めて見えてきたことも少なくなかった。この経験と知見を今後の本講座の運用だけでなく、新たな教材制作等にぜひ活かしていきたいと考えている。

〔注〕

- ⁽¹⁾ 講座へは、OUJ MOOC ポータルサイト (<http://dev.chilos.jp/>) からアクセスすることができる。
- ⁽²⁾ JMOOC 公式サイト <<http://www.jmooc.jp/>> 2014年8月21日参照
- ⁽³⁾ 特定非営利活動法人サイバー・キャンパス・コンソーシアム TIES (<http://www.cccties.org/>) の略称。eラーニングの手法と技術を活用した教育の改善・充実の実現に関する事業を行っている。
- ⁽⁴⁾ ビデオやオンラインテストが組み込まれたマルチメディア教科書。LMS (学習管理システム) や SNS と連携することで、電子書籍をポータルとしたインタラクティブな学習環境を実現している。
- ⁽⁵⁾ 「NIHONGO Starter」 Facebook ページ (<https://www.facebook.com/nihongostarter>) で毎回、Class の開講と登録方法が案内される。
- ⁽⁶⁾ 国際交流基金がヨーロッパの CEFR を参考に開発した、日本語の教え方、学び方、学習の評価のし方を考えるためのツール。日本語の熟達度を Can-do (「～できる」) の形で表している。このスタンダードに準拠したコースブックとして『まるごと 日本のことばと文化』シリーズがある。
- ⁽⁷⁾ 「みんなの「Can-do」サイト」 (<http://jfstandard.jp/cando/>) は、日本語の熟達度を「～できる」という形式で示した「Can-do」のデータベースで、CEFR や JF 日本語教育スタンダードの「Can-do」を提供している。
- ⁽⁸⁾ ブラジル政府による「国境なき科学」計画
<http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kokusai/sesaku/1331005.htm> 2014年8月21日参照
- ⁽⁹⁾ 国際交流基金マドリッド日本文化センターが作成した『まるごと 日本のことばと文化 入門 A 1 文法解説書』を参考に作成した。
- ⁽¹⁰⁾ Class 1 と Class 2 では配信を終えてから2週間の猶予期間を置き、全7週間、Class 3 でも開講から7週間で、講座は終了した。いったんダウンロードした教材は、その後も手元で視聴することができるが、オンラインで行う <Exercise> や <Can-do Check> は、その間だけしか行うことができない。終了時には、Facebook 上でアナウンスし、修了できなかった受講者に向けて、次の Class の案内を行っている。

〔参考文献〕

- 国際交流基金 (2013a) 『まるごと 日本のことばと文化』(入門 A 1 かつどう)、三修社
——— (2013b) 『まるごと 日本のことばと文化』(入門 A 1 りかい)、三修社
——— (2014) 『JF 日本語教育スタンダード2010』第三版、国際交流基金
- 国際交流基金マドリッド日本文化センター (2012) 『まるごと 日本のことばと文化 入門 A 1 文法解説書』、国際交流基金マドリッド日本文化センター
- 羽吹幸・篠原亜紀 (2014) 「理工系大学院留学生の日本語使用に関する一調査」『国際交流基金日本語教育紀要』10号、131-144、国際交流基金